

## 全国会議（環境・保存・災害・まちづくり）合同シンポジウム 地域ポテンシャルを活かす／ストックの再評価

会場：明治大学アカデミーコモン アカデミーホール 日時：9月15日(土) 9：00～12：00

コメンテーター：塚本由晴、大島芳彦

登壇者：安田幸一、篠田義男、松下 督、松本 昭、

モデレーター：連 健夫

彦根アンドレア、今野照夫、倉方俊輔

### ストック活用をテーマに 建築家のあり方を考える

むらじ  
全国まちづくり会議議長 連 健夫



このシンポジウムは2015年の金沢大会から続いている分野横断的企画で、「ストック活用」をテーマに4回目となります。今回は「仕組み、作品、技術」を手掛かりに深堀の議論となりました。

#### 前半：各会議からのプレゼンテーション

環境から安田幸一氏が「未来に向けてストックを作る」と題し、環境そのものがストックである、何を後世に残していくべきか、というメッセージをポーラ美術館や多くの環境賞作品事例を通して説明されました。保存再生から篠田義男氏が「保存再生活動の可能性」と題し、建築は文化を集積したストックであり、都市の記憶装置であるとし、仕組みとして文化財ドクターの活動から、JIA修復塾について教育と専門性表示の話をされました。災害からは松下督氏が「災害の備えと復興」と題し、仕組みとしてFace to Face、作品として事業企画力、技術としてBIMなど最新技術利用による最適解の可能性を指摘されました。まちづくりから筆者は、英国の仕組みとして、CABEが許可申請においてデザインレビュー（協議調整）を行っており、評価軸はコミュニティー推進や二酸化炭素排出軽減など誰でも分かる内容、JIAでは2012年度から事業計画に日本版CABE推進を位置づけ、各支部地域会で萌芽事例が生まれている、と紹介しました。松本昭氏は2000年の地方分権一括法から、地域性を捉えた条例活用が行われており、協議調整システムを取り入れる自治体が増えてきている、企画力のある建築家は制度について興味を持ち、関与する必要があると指摘されました。



安田幸一氏



篠田義男氏



松下 督氏



連 健夫氏



松本 昭氏

#### 後半：コメントとディスカッション

後半は、コメンテーターとして、塚本由晴氏が、「資源の再利用において、地域の生業としての産業を捉えることが大切であり、コモンズ（協働性、共有性）の再構築が求められる、プラットフォームとしてアクセシビリティと、誰が？というメンバーシップの捉え方が大切」と指摘されました。大島芳彦氏は、「建築を社会の資源として捉えることが大切であり、これには企画、経営などビジネス的思考が必要、空き家の不動産ビジネスは今や



塚本由晴氏



大島芳彦氏

500兆円とも言われている、この放置されている資源を活用するためには、事業は多層的で関係者が当事者意識を持つことがポイントである」と指摘されました。

ディスカッションでは、彦根アンドレア氏から「地球環境への意識が大切、環境に関する技術が地域を繋ぐことになる」との話がありました。今野照夫氏は「石巻市北上の復興まちづくりの経験から、住民、行政、JIAやNPOとの協働がうまくいったのは日頃の人間関係がポイントである」と指摘されました。倉方俊輔氏は「ストック活用でうまくいっている事例には、ワクワクするビジョンがあり、それを時間のファクターで捉えることが大切である、プロセスに楽しさを内在させ、建築家はそれを見える化することができる職能」と説明されました。

これから必要な建築家の職能として、

- ①地域ポテンシャルを活かすビジョン設定能力
- ②多様な関係者の集合知としての調整能力
- ③幅広い分野における総合化能力

が、まとめとして挙げられました。

(連健夫建築研究室)



彦根アンドレア氏



今野照夫氏



倉方俊輔氏

